

「はあ……合宿のシャワー最高……」

シャワーの湯が肩から背中へ伝って流れていく。大学の合宿施設。古いけれど設備は一通り揃っていて、シャワー室は男女時間制で使うことになっている。今回この施設を利用しているのは、四つの大学の学生たちだ。施設の設備を使う順番は時間ごとに決まっているが、掲示板の貼り紙はわかりにくく、以前この施設を利用したチームメイトからも不評だった。でも時間さえ守れば問題ない。今は私たちの大学がシャワー室を使う時間だった。他のみんなはもう上がってしまったらしく、広いとは言えないシャワー室に残っているのは私一人だった。

「はあ～～……」

練習の疲れが湯に流されていく気がする。シャワーを浴びながら壁に手をつけて目を閉じた。温かい湯が気持ちよくて、時間を忘れてぼうっとしていた。だから気づかなかった。ドアが開いた音も、足音も。

「……え、誰かいる」

「マジか」

声がして、反射的に振り返った。シャワー室の入り口に、男が二人。タオルを腰に巻いただけの格好で、こちらを見ている。

「……え」

一人は背が高く、落ち着いた顔つきをしている。もう一人は少し小柄で、目が合った瞬間にニッと笑った。

「ごめん、もう男子の時間だと思って」

「え、だって今って——」

「時間割の貼り紙、順番が入れ替わってたんじゃないですかね。毎年あの掲示板、貼り替えが適当だから」

落ち着いた口調で言ったのは背の高いほうだった。

状況を整理しようとして、でも自分が裸であることを同時に自覚してしまって体が竦む。

「出ます、出るので——」

出口へ向かおうとした。そこを、ふわっと腕を捕まれた。

「ちょっと待って、お姉さん」

低くて柔らかい声。振り返ると背の高い男が、私の腕を軽く引いていた。

「もうどうせ見てるし、今更じゃないですか」

「……っ」

「それにお姉さん、今一人でしょ。もったいない」

にこっと笑う。人好きのする顔なのに、その笑い方はひどく計算的で、それでも振り払えなかった。

「え、待って待って、お姉さんの顔見てよ」

もう一人が口元を緩めながら近づいてくる。

「耳まで真っ赤じゃないですか。かわいい」

「……っ、見ないで」

「見ちゃうよ、そんな顔されたら♡」

もう一人はあっけらかんと言いながら、私の後ろに回り込んだ。目の前には背の高い男。背後にはもう一人。逃げ道を塞ぐように立たれ、二人に挟まれる格好になってしまった。

「離して、ほんとに——」

「離さないよ♡」

背の高い男がそっと私の両肩に手をかける。

「怖くないから、ね？」

優しい声なのに、体が動かなかった。

「乳首、もう立ってる」

後ろから男がのぞき込み、そう言った。

「……っ！」

「シャワーの熱さのせいかな～？ どうだろ」

含み笑いの声。背の高い男はそれを聞いて私の顔を見て、それから視線をすっとおろした。

「……どっちにしても、触っていいよね♡」

「待って、まっ——」

男の指が、両方の乳首にそっと触れた。そのまま指の腹でゆっくり、ゆっくりと円を描くように撫でていく。

すり♡

すりすり♡

すりすりすりすり♡

「……っ」

シャワーの湯音とタイルに反響する音の中で、私は息を飲んだ。

「お姉さん、感じやすい？」

男が顔をのぞき込んだまま優しく聞く。

すり♡ すりすり♡ すり♡

すり♡ すり♡

「……っ、ちが」

すりすりすりすりすり♡

「違くないでしょ、もう立ってるよ♡」

後ろの男が耳元でそう言った。距離が近すぎて息